



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

聖母の被昇天 B年 (2021年8月15日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：黙示録 11章 19a節 12章 1—6、10ab節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 15章 20—27a節

福音朗読：ルカによる福音 1章 39—56節

## 「マリアに祈りし ねがいはすべて…」

新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため、教会では主日のミサの中で歌を歌うことができなくなりました。ミサの中で大切なのは歌ではないというのは分かっていますが、しかし、歌えないミサがこんなにも長く続くとなんか寂しくなります。いつの日か皆さんと声をあわせて神さまを賛美する歌を歌いたいものだと思っています。

決して歌の上手ではないわたしですが、それでも歌えないという欲求不満は募ります。それで、黙想の時間に『カトリック聖歌集』をパラパラとめくることにしました。全体の3分の1は知らない歌です。ですから、諦めて歌えません。誰かと一緒にならなんとか歌えそうです。誰かと一緒なら、というのが大切なのかもしれません。教会でみんなで歌えば歌えるというのは大切なことだと思うからです。

実はわたしは、昔は『カトリック聖歌集』が好きではありませんでした。なんか古くさく感じたからです。でも今回、あらためて手に取って歌詞を追ってみると、懐かしい歌もありますし、心にしみる歌もあります。譜面を見ながら懐かしい歌を口ずさんでみると、子どもの頃に教会で体験した情景が浮かんできます。「みははマリア」(305番)を口ずさんでいたら、歌の上手だった叔母のことを思い出しました。夏の頃には家族を連れて里帰りしていた叔母一家は、ちょうど被昇天のお祝い日の頃にわたしの田舎の教会でミサにあずかっていたのを覚えています。その歌声がきれいでした。「みははマリア」にはソプラノのパートがあるのはご存知でしょう。叔母は澄んだ声で歌っていました。「輝かしき君が冠」の箇所を歌い上げる声が聖

どう 堂の中を響き渡っていました。暑い日の澄み渡る青空とソプラノの美しい声の一つになったおもいでです。

『カトリック聖歌集』を読んでみて、こころにしみる歌詞にも出会いました。「聖ベルナルドの祈り『めぐみのみははよ』(321番)に、

「マリアに祈りし ねがいはすべて

わが主は必ず聞入れ給わん

聞きいれたまわん」

とあります。この歌詞の意味は頭では分かっていた。しかし、お恥ずかしい話ですが、この歳になって初めて歌詞を体感できるようになりました。25年近く前、ある修道会の誓願式に招かれました。式の後で、誓願を立てた本人からあいさつがありました。こんなあいさつでした。

「修道院に入るときに、お世話になったシスターのところにあいさつに行きました。そのシスターはかなり高齢でしたが、わたしが修道院に入ると聞いて、こんなふうに話してくれたのです。『マリアさまに、いつも祈りなさい。マリアさまに祈れば、その祈りはイエスさまのもとに届くから。そして必ず実現するから』。今日、誓願を立てて、シスターの語っていたことが本当だと分かりました」。

わたしはこのあいさつを聞いて、特に感動もしませんでした。しかし、今思い起こすと、美しく、信仰に満ちた言葉でした。信仰は体験と理解から成り立っています。理解だけでは信仰は不十分です。体験が必要です。でも、体験だけだと独りよがりになります。マリアさまへ祈ることで、体験と理解のバランスが取れた信仰へと成熟するのだと思います。

「マリアさまに、祈り求めていく」。それはわたしたちの希望の祈りです。ご利益を求める祈りでよい、自分勝手な祈りでもよい、ただマリアさまに願い求めていくのが大切でしょう。罪人であるわたしたちのつたない祈りにマリアさまは耳を傾けてくれて、御子イエスさまに伝えてくださるのです。マリアさまを通して、イエスさまへとわたしたちはつながっていくのです。祈りが実現したかどうかは問題ではないかもしれません。大切なのはいつもマリアさまに祈り求めていく、わたしたちの澄みきった心ではないでしょうか。「マリアさま、罪人のわたしたちをイエスさまの方へと向かわせてください」。